

歌物 (うたもの) の美

天皇即位の大嘗祭に宮中にて上演される「国風歌舞」は、天武天皇の代に始まり、やまとことばのやさしい響きの中に、古代のおおらかな旋律と舞振りが特徴です。

笏拍子を持つ拍子 (歌主) の独唱に始まり、付歌の合唱に合わせて笛・箏篳と和琴が歌を装飾する形で演奏されます。そのほか、全国の神社にて奉奏している「神楽」があります。

○御神楽一具 (要約版※)

神宮では神嘗祭、宮中では賢所にて神霊を和めるため、夕刻から夜中に奉奏されます。

「人長舞」は、神迎えと神送りの二曲で、鏡を現す輪と榊を採物に庭火を中心に舞います。

人長式から庭火へ



縫合



庭火 本歌



庭火 末歌



阿知女とお介 (和琴に本方と末方の拍子) 及び本方と末方の拍子が独唱。



歌の合唱 (和琴、本方と末方の拍子の歌に合わせて、付歌と管方の合奏)



- 神迎え (庭火、阿知女作法、榊、韓神)
- 神遊び (小前張阿知女、千歳、早歌)
- 神送り (星吉々利々、朝倉、其駒)

神迎え 人長舞 (韓神)



※主な9曲を選定、旋律繰返しを省き
歌意は通じる形で楽曲の順は同じ。

神送り 人長舞 (其駒)



あづまあそびいちぐ
○東遊一具

古代、駿河の宇度浜に舞い降りた天女の舞姿に由来する。子孫繁栄を願う神事舞。

こまおやし、あはれ、こわだし、いちうた、にうた、するがうた、あおずり、ほう
拍子、阿波礼、音出、一歌、二歌を前奏の後、駿河歌で「青摺」袍の舞人が舞う。



かたおろし (管方独奏の間に袍を片担ぎ)、あはれ



もともごうた (「神風や多度の社に尾津の松、天晴 連れ連や れ連や連、多度山 尾津の松」※)



おおびれうた (渦巻き形で巡り退出「大比礼や小比礼の山 はや寄りてこそ」)



※地域ごとの歌詞

ごせちのまい
○五節舞



天武天皇が琴を弾くと天女が現れ舞った故事による。大歌「その唐玉を 少女ども、…」
本来は十二単の五人舞で、扇を閉じて左右に舞った後、扇を開いて舞台を輪状に巡り退出。

○久米舞

参音声「宇陀の高城に…」で舞人が登台して、揚拍子「前妻が、魚乞はさば…」で舞う。



抜剣 (和琴独奏)

伊麻波余「今はよ…」舞の後、退出音声。



神武天皇が戦勝を祝い詠んだ歌声に合わせた兵士の舞が起源。力強い歌声とのびやかな舞。

○豊栄舞



巫女装束の少女が、榊を採り、「日と尊さ（内宮）と地の恵み（外宮）」を歌にして舞う。間奏は、当会固有句「多度の山、雨のまにまに巡るなり、山里めぐむも、海川めぐむも」

○浦安舞

扇の舞



剣の舞



「天地の神にぞ祈る 朝風のごとくに波たたぬ世を」昭和天皇の詠歌神楽で、全国に普及。